

特集2 (Special feature part 2)

回想：エピソードが語る実践研究の回想

——「宇宙船地球号との出会いと教育実践研究」——

**Reminiscence: Episode talks about practical research:
Encounter with Spaceship Earth and Educational Practice
Research**

宇土 泰寛*
Uto, Yasuhiro*

プロローグ

宇宙船地球号 (Spaceship Earth) との出会い、それはどんな意味を与えたのだろうか？ その出会いはいつだったのだろうか？ 宇宙船地球号には、外へ向かう旅と内へと向かう旅、未来へ向かう旅と過去へと向かう旅があった。外へ向かう旅は、自分の誕生した故郷の大地と海があり、そこで暮らす人々の姿があった。そして、この風景は、日本、世界へ、さらには宇宙へと向かう旅である。内なる旅は、家族そして、自らの心象、内面への旅であり、その内面が外なる旅と相互関連しながらまるで円環の中をめぐるがごとく廻り廻る世界であった。この宇宙船地球号との出会いは、この宇宙船地球号という太陽系第3惑星に生まれているのだから、出会っているはずだが、出会っていなかったのである。しかし、これは、私自身だけではなく、ホモサピエンスとしての現生人類自体が明確には出会っていなかったのである。この宇宙船地球号の概念が生まれ、認識されたのは1960年代に入ってからである。ケネス・E・ポールディングが研究発表で、地球の有限性と宇宙飛行士経済を訴え、バックミンスター・フラーが宇宙船地球号の操縦マニュアルを提案した。

この宇宙船地球号と具体的に出会ったのは、アポロ計画で宇宙に浮かぶ青い地球を宇宙から送られてきた映像で見たときであり、教育場面として出会ったのは、ニューヨークに住んでいた時、ニューヨーク大学のゾーン先生とお話をしているときに小さな冊子を見せていただいたときである。それは、1984年、ニューヨークの摩天楼がそびえるマンハッタン島に隣接するロングアイランド島にあるゾーン先生のご自宅であった。

宇宙船地球号の外への旅と内なる旅の2つの旅を始めようと思う。しかし、この2つの旅となるエピソードによる回想自体が、また新たなエピソードを浮上させてくるような気もする。まるでフィールドワークをして、エスノグラフィーを記述する旅のようでもあるからだ。

この半世紀で、教育研究のスタイルも大きく変わってきた。



写真1. 宇宙から見た宇宙船地球号

「行動科学を基礎とする数量的研究から文化人類学や認知心理学や芸術批評など、新しい人文社会科学を基礎とする質的研究へ」¹⁾とパラダイム転換し、この転換の時期に、教員として、研究的実践者として、教育研究に関わってきた。しかも、佐藤学先生、箕浦康子先生など、このパラダイム転換を日本で核となって担って来た研究者と出会い、現場では、まだ否定されていた教育実践を高く評価して研究者のプロジェクトチームのメンバーに入れていただいた。そこで、展開されていた質的研究の方法が、エスノグラフィーである。エスノグラフィーは、「2つの世界の旅人」²⁾と言われている。「エスノ (ethno)」は民族や人種のことを意味し、「グラフィー (graphy)」は、書いたもの、記録したものを意味しており、未知の世界を体験し、自らの世界にその異文化な世界を翻訳してきた人類学の分野で生み出されたものである。

いよいよ自らの実践を、そして研究を回想する人生のターニングポイントを迎え、振り返ると走馬灯のように、様々な思い出が、エピソードとして浮かび上がり、記述することになってきた。このエピソードは、教員生活40年間の中のものであり、この長い年月を過ぎてても浮かび上がる事実である。そこには、エピソードを再度位置付けてみると、自分の子どもの頃の故郷での体験や海外生活での体験である「体験的エピソード」、自分の視点や発想の契機となった書物や研究者との出会い、研究上の出来事などの「研究的エピソード」、そして、最も多く浮かび上がってきた学校や地域、海外での教育から浮かび上がってきた「実践的エピソード」がある。

これらのエピソードが、織りなす関係をさらに探究しながら、研究と実践、生活と実践の2つの世界を旅してみたい。

1. 故郷の体験と学校の教育カリキュラム、そして環境問題へ

長崎の実家は島原半島にあり、10メートル先は波静かな有明海である。家から座ったままでも、有明海はもちろん対岸の熊本県、そして福岡県の大牟田港まで見えた。有明海は、世界的にも干満の差が大きく、フランスの世界遺産モンサンミッシェルに行った時も、この干満の差には驚かなかった、生まれてからずっと家から眺め、その海に入った経験からである。海の潮がひき、そこには広大な干潟が現れる。まるで海のサバンナ草原である。肉食の生き物も草食の生き物も、そして、有名なムツゴロウもいる。小さな穴を見つけて塩を振りかけると細長いマテ貝が飛び出してくる。潮が満ちてくるとその海の草原を魚がゆったりと泳ぐ。その魚と共に泳ぐのである、幼児期からの原体験である。

東京からいここがやってきた。いっしょに泳ぎながら、「やっちゃん、何m泳げるの？」と聞いてきた。「何m！と言われても。」、答えようがなかった。沖に舟が泊っているとそこまで泳ぐ。しかし、東京で、教師になってやっとわかった。学校にプールがあって、コースが作られ、まず25m泳げるのを目指す。そして、何秒で泳げるかを競うのである。泳ぐのは早くきれいに水面を動くことなのである。



写真2. 家から見た有明海と諫早湾干拓水門

このエピソードは、総合的な学習が提示されたとき、カリキュラム論の研究において、すぐにこの2つの泳ぐイメージが湧いてきた。教師が何を教えるかというカリキュラムに対して、学習者が何を学んだかという学びの履歴としてのカリキュラム論への転換であり、総合的な学習では、「海に潜ると、海藻や岩場やそれぞれの場所で、小さな魚と泳げるすばらしい世界があるのに」、決められたコースしか泳げない教育との違いを痛感したものである。きれいな海岸、人間の生活と環境との共生は、諫早湾干拓の事例にあるように、有明海で常に提起されてきた課題である。

2. 帰国子女との出会いと故郷長崎の思い出、そして国際教育へ

教員になる前、東京の目白にある波多野ファミリースクールに行ったときである。普段の日の午前中なのに、学校に行っていない子と出会った。実は、海外から帰国した子どもであった。その頃、日本の企業は海外に進出し始めていたにも関わらず、日本国内の教育は国際化に対応していなかった。そのために、学校に行けなかったのである。そして、このような子どもたち、いわゆる帰国子女に教える講師になったのである。

この国際教育と共に歩んできた原点を考えると、故郷である「長崎」「島原」とつながってくる。日本の西の端にある長崎は、未だに新幹線が通っていない県である。しかし、歴史を振り返ると、西の端どころか、一番西洋に近い場所であり、現に平戸、長崎、口之津は、南蛮人と呼んだ人々が来て、この地域の子どもたちに、イソップ物語を読み聞かせ、西洋の楽器で音楽を奏でていたのである。この雰囲気は、日本の普通の風景では、お寺のある所に教会があったり、潜伏キリシタンの跡地があったり、現在でも、他の日本の地域とは異なるものである。そして、私の叔母は、ダブル（ハーフ）であり、いとこたちがクォーターという家族構成からも、世界とのつながりや国際化が一步先じた故郷の雰囲気の中で過ごしたことと潜在的にはつながっているように感じる。

3. できない新米教員とできる子どもたち、そして子ども中心の教育へ

新卒と言いたいが、学部を卒業してすぐに教師になったわけではない。世の中のピンからキリまでアルバイトをした。学費と当時関わっていた原発問題（原子力発電所建設反対闘争）に東京から250km離れた現地に、高速道路を使って毎週のように地域に入り込み、地域の社会構造の調査を行うためである。しかし、アルバイト先の社長が、なぜか正社員よりも優遇してくれ、何億円もの企画会議や出張にも、私を連れて行ってくれた。そして、普段は時間的ゆとりがあり、教職試験の勉強もでき、無事に東京都の教員試験に受かり、新宿の高層ビルの近くの小学校から教員生活が始まったのである。

最初は、2年生の担任である。まず給食であるが、私は給食を食べたことがなかった。なぜかお弁当の学校だった。その準備の仕方がわからない。しかし、さすが2年生、自分たちでやっていくのである。次は、音楽の時間である。ピアノは教職試験用に練習しただけである。放課後、高学年を担当する音楽専科の先生にも教えてもらい練習した。これで、何とかなる。授業も始まり、歌を合唱するためにオルガン演奏をした。子どもの歌に合わせるなどできない。練習の時の楽譜だけ見てやっていたのと次元が違う。オルガンにテープを入れ自動演奏にするか、先生はできないと告白するかだったが、新米教員としてできないと告白したのである。情けない場面である。しかし、次の音楽の時間、なんと教室に革命が起こっていたのである。2年生の子どもたちが、家からカスタネットやトライアングル、タンバリン、缶詰の空き缶など、そして、小さいころからピアノを習っている子がいたのである。子どもたちの楽団である。「子どもはできる。」教員としての原点である。

4. 帰国子女と学級スポーツ、そして学級のフォーメーションへ

3年生の学級にニューヨークからの帰国子女が入ってきた。教員になる前から帰国子女には接していたので、個別の学習指導には自信があった。ただ、今度は、学級の中にうまく適応してくれるかが課題であった。その頃、適応＝言葉の習得・上達という考え方であった。しかし、子どもたちの様子を見ると、最初の興味関心、そして何ができるか試す時期、その結果から学級の中に位置づけていく。言語適応よりも、その子の居場所づくりをというその後の多文化共生の空間づくりにつながる発想が生まれた。

その子は、ボールを蹴るのが得意だった。学級で、キックベースボールを取り入れた。

子どもたちは、ソフトボールやハンドベースボールを希望したが、キックベースボールにした。小さな球をバットで打つのは難しい。特に、女子はいつも三振になってしまう子が多い。いい場面が女子に回ると男子が「あーあ、三振か」とやる前から

言うのである。実は、足で蹴るのが最も差がないことを知り、サッカーと異なり、蹴る順番が一人一人に回ってきて、スポットライトを浴び、得意な子が不得意な子にもアドバイスができるのである。これを体育の授業ではなく、自分たちで運営する学級スポーツとして行ったのである。帰国子女の子も、すっかりクラスに溶け込み、このキックベースボールは、必ずやる学級スポーツになったのである。

このキックベースボールはどの学年でも実施した。その中で、東京の港区の学校で、このスポーツを勝っても負けてもきちんと振り返るようにした。すると、子どもたちは、バラバラフォーメーション、バランスフォーメーション、ムーブフォーメーションを見出した。教室の天井にこの図を掲示した。どんなに強い子がいても、チームがバラバラではいつかは負ける。野球のようにきちんと守備につくのがバランスフォーメーション、そして、強く蹴る子には後ろに下がるなど相手を見て変えていくのがムーブフォーメーションである。

実は、学級で問題が発生した時、子どもたちは、今バラバラフォーメーションだよと言う。その解決には、ムーブが必要など、自分たちが問題解決の体験をしているので、他の問題に対しても前向きに学級全体で対処していったのである。

5. 新卒の道徳授業研究と道徳部の先生方、そして道徳の自作資料作りへ

教師は、小学校の教師であっても、自分の得意な分野での研究会に入り、研究を続けていく。私は社会科の高等学校の専修免許も持っており、当然社会科の教育研究会に入るつもりだった。しかし、新卒教員1年目の研究授業を代表でやらされる羽目になった。道徳の授業である。これが、教員人生を分けた。椋山女学園大学のように丁寧に指導法を教えてもらっていない。何しろ大学時代は全共闘世代で、授業はほとんどなく、レポートのみの時代である。大学闘争の後も、原子力発電所の反対闘争で大学どころではなかった。ただ、そこには、東大、早稲田、理科大など大学を越えたつながりがあった。

この道徳の研究授業に向けて、学校は違っても、丁寧に指導助言してくれたのが道徳部の先生方であった。何とその関係で、私は、道徳の研究をすることになったのである。

この道徳の研究授業では、必ず自分の自作の道徳資料で授業を行った。これが、現在でも、道徳の教科書に使われている「地球を救おう子ども会議」や「モンテゴメリーのバスキング牧師とバスボイコット運動一」となっている。

普通は、公開の研究授業であればあるほど、副読本の中の道徳資料を使って授業を行うと思う。しかし、当時、道徳の価値は、将来役立つ用に理解させればよいという風潮もあり、副読本の資料の読み聞かせ的な指導も多かった。

この考えに対して、学級を学習集団というより、リアルな社会としての学級社会ととらえ、子どもたちにとって実際の社会である学級で価値が実現できないのはおかし

いと考えていた。そこには、価値ジレンマもあり、それを実行するときの心理ジレンマも起こるのである。だからこそ、学級社会の抱えている問題構造を踏まえた上で、子どもたちに問いかける道徳資料、つまりその学級に合った独自の道徳資料を作るという考えであった。

この背景には、大学の学部時代に、独自に学んだ「社会学的機能主義と構造主義の比較研究—構造概念と認識過程を中心にして—」でのT・パソンズの理論、レヴィ＝ストロースの構造主義があり、実際に、原発問題にかかわる中で、「地域社会における権力構造と住民運動」を地域の中に入り、この権力構造を見出していった体験があったと思う。

6. ニューヨークでの生活と内部の異文化対立、そして現地の中へ

ニューヨークでの生活が始まった。ゆったりした緑に囲まれた公園のような中にレンガ造りの団地があった。子どもたちは、郊外からスクールバスで登校してくる。小学校教員として行ったが、7年生から9年生までの中学生を受け持つことになった。そこでは、中学3年間で子どもたちがどのように変化しながら成長していくか、中学の教師の考え方や小学校と違う教師文化を持っていることを実感的に知ることができた。

実は、この違いに加えて、現地の外国人教師と日本人教師の考え方や行動、文化の違いが大きく、むしろ対立の様相を呈していた。日本のいわゆる学校での校内研究のスタイルが正しく、これに従って研究を行ってくれということへの反発もあった。2年目に、研究推進委員長になり、日本人学校に選ばれてきた教師は外国人スタッフも含めて、自らのテーマで研究できるはずという視点に立って、研究スタイルを一新した。その変わり、一人一人の研究を基盤にモザイクのようにつなぐために、研究推進委員会は研究を深める必要があった。

また、子どもたちへのまなごしも問い直す必要があった。よく「異文化はがし」といわれたが、日本の学校文化と行動スタイルが正しく、日本の学校のように行動させることに重点が置かれていた。日本に帰国しても困らないためである。しかし、現地校の生活が長い子は日本人学校の段階で、不適応とみなされてしまう子もいた。国際化の中で、日本の学校も変わらなければならなくなった時代であったが、日本国内でやっていた教育を日本人学校でもやればいいという根強い考えがあったのである。

研究推進委員長として、とにかく現地校で学んでいる子どもたちを見に行きましよう、英語ができなくても外に出て、多くの現地校を見て回ったのである。

7. 移民の子どもたちを迎える ESL と多様な学級, そしてオルタナティブスクールへ

現地校に行くと、まず ESL (English as a Second Language) のクラスに案内される。アメリカに来たばかりの子どもたちが、ESL 専門の先生から学んでいるのである。

実は、150年ほど前、ニューヨークに、英語を話さない子どもたちがやってきて、たいへんだったという。今、日本語を話さない子が来てたいへんだと日本ではいうが、この問題は150年前からあった問題で、アメリカなど移民の多い国には、ESL が整備されているのである。

私が参観に行った普通の学級を見ると、教室の中のデコレーションがすごい。日本の小学校でも殺風景に見えてしまう。一斉授業で、黒板の前に先生が立って、ひたすら話をする風景ではない。グループの子どもたちが先生の周りに行き、学び終わると、自分の席に戻り、教室に用意されている学習カードを自分でやっていくのである。時間割も日本ほど厳格ではなく、子どもたちの学びの様子で変わっていた。

さらに、驚いたのは、道徳教育で有名なコールバーグの実験学校に行ったときである。オルタナティブスクールといって、学校の中に別ルートの学校があったのである。そこでは、ジャストコミュニティと言って、正義を基盤にした学校運営がなされており、コールバーグと言えば道徳のジレンマ教材で有名であるが、私にとっては、ジャストコミュニティが重要なインパクトを与えてくれた。

8. 日本の海外進出と教育摩擦, そして地域社会との共生へ

この当時は、“JAPAN as No. 1”と言われた時代で、日本の企業がどんどん海外に進出していた時代であった。現地校に行くと、日本の子どもたちが大勢学んでいた。クラスの半分以上が日本人という学校も出てきていた。日本人排斥運動にもつながる事態である。5年生からしかない日本人学校の在り方も問われた。アメリカの学校は、地域の住民が税金を出して学校を運営する仕組みである。地域住民の声は大きく影響する。そこで、何が問題かを調査し、その問題構造を分析し、論文としてまとめた。アメリカの人々にも知ってもらうために、英文のレポートも書いた。

その時、日本人学校の先生だけではなく、この地域の子どもたちの問題を現地の立場から考えていらしたカニングハム久子先生ともつながった。カニングハム先生は、日本人学校に特別支援の学級を設けるきっかけを作られた先生である。

ちょうどこの頃、日本の TBS テレビがニューヨークに来て、私のレポートを読み、この教育摩擦の問題を報道特集で取り上げてくれたのである。

9. 現地取材とブルックリンブリッジ、そして、驚きと恐怖

社会科で、ニューヨークを素材にできるものは、自分の足で歩いて、調べ、資料を集め、映像を撮り、教材を作っていた。中学の地理の教科書にも、都市問題を扱う単元があった。ここはせっかくだから、ニューヨークのアメリカの都市問題を独自の教材でやろうと考えたのである。まずは、マンハッタンの歴史である。当然ハーレムが出てくる。その当時は、危険で近づくなと言われた地区である。歴史を調べると、違った風景が見えてくる。ハーレムの変化と地下鉄開通、ドーナツ化現象など興味深いテキストができた。また、ニューヨークの観光名所として、レンガ造りで有名なブルックリンブリッジがある。1883年に完成した橋で、この歴史を詳しく調べ、ブルックリンブリッジの写真を撮りに行った。この時、つり橋の橋げたの上から見るといい風景が撮れるだろう。そして、カメラを担いで上り始めたのである。そして、頂上に着くと、なんとそこにはホームレスの人が寝泊まりしていたのである。お互いに顔を見合せ、もうびっくり……。



写真3. ニューヨークのブルックリンブリッジ

10. 問題山積の子どもたちと教師、そして予防的生活指導へ

ニューヨークから戻り、赴任したのが東京の羽田空港に近い京浜工業地帯の中の学校である。学校に行くにも、産業道路や環状八号線を通り、ダンプカーやトラックが行き交い、踏切も2か所もわたる必要がある学校であった。学校の様子を見に行ったとき、本当に息苦しくなり、緑の中のニューヨークとの違いに驚いたのである。

学校に赴任した後も驚いた。全校朝会に、90人もの子どもが遅れてくるのである。校長先生のお話もほとんど聞いていない。確かに、先生方も3年くらいですぐに転出する。赴任するのは、新卒か海外などその事情を知らない教師である。

しかし、下町の実態を回って調べてみると、住環境には課題もあったが、下町の油にまみれた小道沿いにある工場同士はつながり、日本のモノづくりを支えていた。

学校の生活指導主任になった。まず全校朝会への遅れの問題である。各学級の後ろに白線を引いた。遅れた人はその白線の後に並ぶ提案をしたが、子どもを管理するようなやり方には反対と言う意見があった。「いやそうではありません。この地域の子は様々な家庭環境があり、遅れてくるのには何か理由があるかもしれません。その理由を聞いて下さい。」と説得した。このやり方で、遅刻は激減したのである。そして、担任をしている5年生の子どもたちと一緒にどうしたらよくなっていくだろうと考え

た。子どもたちから、「ひがしこうじや運動」をやろうと提案があった。「ひ」とりひとり自分で並ぼう。「が」んばっていい姿勢をつづけよう。「し」っかり話を聞こう。この「ひがし」から呼びかけることにした。校長先生は、全校朝会で毎回この呼びかけを話して下さった。PTAも新しい学校の取り組みとして紹介してくれた。

この背景には、生活指導の考え方で、何か問題が発生してから対処する生活指導が多かった。これに対して、予防的生活指導という考え方で、今回は取り組んだ。問題の原因を探り、その原因を取り除き、問題を発生させない考えである。これは、学校が実際に変わったのを知り、近隣の学校長会や教育委員会でも評価されたのである。

11. インドシナ難民の子どもといわゆる国際理解教育、そして宇宙船地球号へ向かう契機

私が持った5年生のクラスに、インドシナ難民の男の子がいた。ニューヨークから帰ったばかりの私は、むしろやりがいがあった。多様な子どもたちがいて、国際理解教育をやるチャンスだからである。また、ニューヨークの地域調査で、不便な地区の団地には、外国からの家族が住みやすいことも知っていた。さっそくラオスの国を知ろうといわゆる国を知る国際理解教育をやったのである。何回かやっている途中で、社会科見学があり、バスに慣れていない彼は一番前の私の隣に座った。するとバスの中で、あの国際理解はやりたくないと言うのである。「え～！あなたのためにやっているのに」と内心は思いつつも、「どうして？」しか言えなかった。彼も明確にはわからない風であった。これは、ショックだった。

振り返ってみた。確かに子どもたちが調べてくることは、ベトナム戦争で荒れた国土や家並みであった。国際理解をやっているつもりが、当事者にとってはそうではなかったのである。これは、私自身にとっても、大きな転換点となった。研究者の間では、まだ帰国子女が研究の対象であり、外国人児童生徒の問題は取り上げられていなかった。むしろ外国人児童の問題の探究へ、そして宇宙船地球号プログラム開発の足掛かりになったのである。

12. 実践上の課題と理論研究の融合、そして宇宙船地球号プログラムへ

都立教育研究所の研究生に合格し、配属されたのは外国語研究室であり、高校と中学の英語教師、小学校の国際理解教育の教師が私ともう一人であった。学校から離れ、研究に集中できるとみんな喜んだが、研究室運営のためにほとんどの時間を取られ、自分の研究はなかなかできなかった。しかし、それでも、学級担任をしながらの学校よりは時間が取れた。

この時、開発したのが、「宇宙船地球号プログラム」である。まったく独自に研究開発する必要があり、この時、役立ったのがG. H. ミードの自己概念であり、態度形

成を目指す研究であった。ミードの自己概念である「I と me」、役割取得など理論はカリキュラム開発にあたってとてもヒントになった。この時、従来の心理学では、情意と認知と行動と三つの要素で取り上げられているが、小学生の段階では、情意・認知・価値・技能の4つの側面でプログラムを作った方がよいと判断し、独自に4つのシーンで構成した。また、欧米の教育研究を独自に探究し、現在でいうアクティブラーニングを取り入れた展開にした。

このプログラムを小学校のクラスで実践した。この時の授業者が山下亜子先生である。山下先生の指導力もあり、子どもたちもしっかりと考え、発言した。自己概念の変容を追った。この研究の中で、授業にはいろいろなアプローチがあるがテキスト中心の授業で子どもたちのできる、できないを判断している。知識の集積から態度形成に至るには転換点が必要であり、どのようにして起こるか、子どもの学びのタイプとどう関係するかということを見出したのである。この研究成果を都立教育研究所で発表したのだが、大勢の先生方の前で見事に怒られてしまった。この研究は、理科なのか社会なのか道徳なのか特活なのかわからないということと小学校の教員でこの理論的な研究ができるはずがないというものであった。何しろ総合的な学習が始まる10年前であった。

しかし、異文化間教育学会で発表したときは、たいへんな反響で、学会の最後の会長先生から皆さんの前で、お褒めの言葉をいただいた。この発表を契機に、大学の研究者の方々からの研究プロジェクトへのお誘いがあり、小学校の研究的実践者としても活動するようになったのである。

13. 東京のはずれの自由な学校と若い教師たち、そして Learning Together の翻訳へ

東京のはずれにあるこの小学校では、校内研究が盛んではなかった。しかし、自由に過ごすことができた。若い先生に、研究することの大事さも話し、サロン風になり語り合う自主的な研究サークルを開くようになった。そこで、これからの教育にとって重要なグローバル教育や多文化教育の研究を進めた。その時、イギリスのグローバル教育のテキストに出会い、それをみんなで翻訳することにした。これが、出版されることになった『Learning Together いっしょに学ぼう—学び方・教え方ハンドブック—』である。翌年には、著者のスーザン・ファウンテンさんが来日し、この本のワークショップも開催したのである。

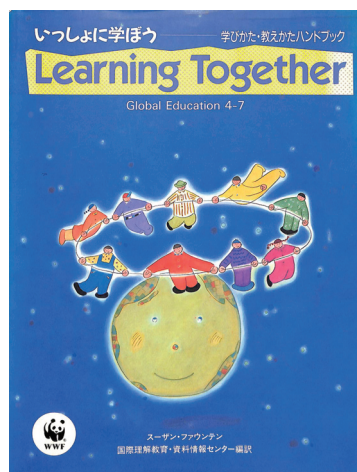


写真4. 若い仲間と翻訳した Learning Together

14. 初めての1年生の担任と中国からのM君、そして学級が動物研究所へ

都立教育研究所から戻り、自らも宇宙船地球号プログラムを実施できるかと思いきやなんと人生初めての1年生の担任になった。1年2組の担任である。両隣は、ベテランと中堅の女性の先生である。1年生の先生が子どもたちを学校文化に慣らしているのを実感することになった。両隣のクラスと違って全校朝会でうまく並べないのである。



写真5. 東糀谷小学校（東京都大田区）の1年2組

先頭はM君である。中国からの帰国孤児の子どもである。たいへん元気に動き回る子どもであった。学級でも、授業が始まっても席に着かない。隣の中堅の先生のクラスを見てみると怒るときは怒る。なるほど1年生のしつけの基本である。クラスに戻り、怒るときは怒るを実施した。しかし、いつも怒られるのはM君である。これ以上怒ると中国から来た子は怒られる存在というメッセージになるなど考え、M君の行動を見ていると、学級文庫のある前で図鑑をいつも見ている。動物図鑑である。国語の時間に早く教科書が終わり、「今日は世界の動物の勉強をします」と言った。世界の暑い国の動物、温かい国の動物、寒い国の動物について、次々と子どもたちから名前があがった。黒板もいっぱいになった。「もういないよ」の声、するとM君が立ち上がり、「トド」と言った。学級のみんなも「トドかあ」と言う声の中で、M君と心がつながったような気がした。それから、席に着くようになったのである。その後、クラスは動物研究所のようになり、「生き物地球紀行」のビデオも録画して来て、よく見た。3学期になり、国語の「動物の赤ちゃん」という長い文を書こうという単元がある。この文に出会った子どもたちは、宿題でもないのに、毎日400字詰め原稿用紙に書いてきては朝の会で提出するのである。最高に書いた子は90枚、M君も70枚である。ほかの子たちも30枚は書いた。作文は、書きたいと思うような体験をたくさんして書くものだと教えられた。

実は、10数年たって、M君からメールが届いた。大学に入学できました。他の中国帰国の仲間と違って、どうして大学まで行けたのか振り返った時、「高校、中学のとき、そして小学校の時を思い出しながら、小学校1年生の時の宇土先生を思い出しました」と言うのである。これは、異文化間教育の言語習得の観点からも、外国人児童生徒がコミュニケーション言語ではなく、読み書きの学習言語で、つまり、学びから逃走してしまうことが多いことを考えると、M君は言語習得の臨界期の前に、書くことへの自信を持ったこと、学級の中で動物研究所へ大きく貢献し、怒られる存在ではなく、自尊感情（セルフエスティーム）を持てたことなど、研究的視点からも有効だったと後になって私自身も振り返ることができた。教師にとって、「判断留保の原則」による視点や方法の転換は人の人生も決めるものだと痛感した。

15. 朝の会と世界の挨拶、そして国際理解へ

1年生の朝、出席をとりますと一人一人名前を呼んでいく。最初は、元気よく、ハイ！と手も指先まで伸びて返事するが、だんだん慣れてくると、この元気よさもなくなってくる。もちろん健康観察も含まれているが、その健康上から来ているものではない。ある時、一人の子が「僕の隣には、インドネシアの人が住んでいる」と話してくれた。するとほかの女の子が、「私のパパは今タイに行っているよ」といろいろな国名が出てきた。私が、インドネシアではおはようございますと何と言うのだろうかねと聞くと、「スラムッパギ」と答えてくれた。タイの言葉も聞いてくる、M君の中国では何と言うの？ この子どもたちのアイデアを朝の会に持ち込んだのである。子どもたちは、自分の好きな12か国の「おはよう」を現地の言葉で言う。すると教師もその国の言葉で答えるというものである。

これは、学級を活性化し、世界につながる学級活動になった。子どもたちも、得意げにいろいろな国の言葉で家庭でも話す。授業参観があったとき、保護者からは教科の勉強ではなく、この朝の挨拶の様子を見たいと要望が出たのである。

16. 新たな教育課題と第三の学級文化の導入、そして学級、学年の活性化へ

京浜工業地帯の入り口でJRの駅にも近い小学校に異動した。この地域の中心であり、商店街、住宅街とかなり学校の周りの風景は変わってきた。生活指導の問題もなく、校内研究も盛んである。高学年を持つことになったが、私立中学へ進学する子どもも多く、前の学校とは様相が異なる。しかし、進学志向の子どもは塾通いとそうでない子の学力差が歴然としており、教師がよく対象とする中間層には誰もいないという典型的な教育課題を抱えていた。また、学校は、勉強のできる子と運動のできる子は目立ち、活躍する場がある、つまり勉強文化と運動文化の二つで成り立っているのだ

る。いずれの文化にも属さない子どもたちが出てきているのにである。

そこで、まず学級の学習スタイルにいろいろな工夫を凝らした。まず一人一人が自分の研究テーマを持つ。特に、学年最後の社会や理科にはとてもいいテーマがあるにも関わらず、学年末で時間がなく素通りして教えてしまうことになる。教科書が一つ一つ積み上げて最後に地球的課題に至るという発想からこのようなことになるのである。そこで、最初にその単元を学習し、1年間を通して、自ら探究していこうというやり方にした。この発想には学年の先生方も同意し、週に1回、テーマ別の学習をする子どもの教室、算数が苦手だという子のための教室など、学級を解体し、3つの教室に分かれて取り組み、最後は卒業論文を書くというものであった。また、日常的にも、教室を研究室スタイルにし、塾に行っていない、初めてその単元を学ぶ子に指導し、後半全員で学び合うというスタイルをやるなど、様々にチャレンジした。

この学び方の改革と学級文化に第三の文化を取り入れる方法は、子どもたちをたいへん活性化し、深い学びへとつながった。特に、教室に映像の編集機を備え、常時テレビクルーが組織され、学級スポーツなども撮って編集していたのである。

17. 自己カードによる内省とクラスの宝物、そしてアメリカ教育改革フォーラムへ

この学級の一人一人の学びを変えたのが、自己カードである。毎日、家に帰り、一日を振り返り、3～4行の振り返りを書き、どのくらい学習したかを記録するのである。毎朝、提出し、教師は帰りの会までにチェックし、コメントを書き、返すというのを繰り返した。私の実践では国際理解教育などビッグな活動が目立つが、実は、1学期は、「この学ぶとは何か？」を徹底的に学級で考え、実践していくのである。当初、保護者から、「学校で何があったのですか？」と問い合わせがあった。「どうしてですか」と聞くと、今までは、「宿題は？」と言わないと勉強しなかった子が、自分で机に向かって勉強していると言うのである。

このカードによるコミュニケーションは、学級での出来事、教育実践への子どもたちの解釈、評価も入る。その中で、より深い内省や言葉はクラスの宝物として、学級の壁に掲示し共有していく。たとえば、「掃除は自分の心が現れたもの」「考えることのできない世界ほど、怖いものはない」「心に鍵をかけちゃいけない。心をいっぱい広げて皆と見つめ合おう」「正しい判断が心の成長、一人一人へのサポートが本当の幸せ」などであり、そして、クラスで何かあった時、この言葉が問題解決の礎になったのである。

そして、学習は、最初はゆっくりでも、後半は皆が予習、復習をやってくるのでどんどん進み、その余った時間で、テーマ学習やプロジェクト活動を行ったのである。

この一人一人が内省しながら、学級全体で共有し吟味して、学級の文化を創り上げることに對して、たいへん関心を持ってくださったのが、アメリカのキャサリン C. ル

イス先生である。アメリカの教育改革フォーラムにパネリストとして招待してくださったのである。そして、現在、教育学部の山田先生もかわりを持っていらして、再びお会いできた。そして、卒業式前の6年生の3学期に、このようなチャンスは小学校の先生にはないと言って送り出してくださった学年主任の先生には今でも感謝している。

18. 日常的な活動と災害時の活動、そして市民性教育へ

阪神大震災が起きた。学級のテレビは何事があっても教育テレビを流している。しかし教室には映像編集用の古いテレビがあった。そのテレビから流れてくるニュースはただ事ではない。「今日は授業をやめる」と子どもたちに言った。子どもたちもこの重大さに気づき、情報収集から始まった。そして、教室は一変していく。情報を模造紙に書いていくグループ、そして、テレビクルーも立ち上がり、そのドキュメントの撮影を実行した。液化化や被害の様子を映像に編集していくのである。液化化などを調べて、絵にかき、テレビ上で解説するなど、次々と活動は生まれた。隣の学級に、そして、学年に救援活動を呼びかけ、先生たちも呼応し、児童会にも呼びかけて全校の救援活動へと発展した。募金活動ではPTAも一緒に活動した。この活動をずっとテレビクルーは追い、テレビドキュメントを生み出したのである。この活動は、市民性教育が叫ばれ、地域への参加や防災教育の重要視されている今日でも、意義のある活動となった。

19. 外国人児童の増加と日本語加配教員、そして学びを変革する地球子供教室へ

日本語指導の必要な外国人児童が10名を越え、日本語指導の加配教員を取れるようになり、だれかやれる人はいませんかという話が出てきた。しかし、誰もいなくて、私がやることになった。ニューヨークで、日本の子も含めて外国人児童がESLのクラスで学ぶ姿を見て、いずれ日本でもこの事態は起こると予想し、帰国後、日本語指導の夜間講座を受講しており、教材や方法についての知識もあり、やることにした。オルタナティブな実験学校の在り方もヒントになった。教室も何もない状態からの始まりであり、ほこりをかぶった小さな物置を春休み中にきれいにして、始めることにした。机も古いパソコンも寄せ集めである。狭い空間で置き場所がなくパソコンは机の下に並べた。ここに置いたのがパーソナルなパソコンではなく、対話を生み出すパソコンとなる。4年間の中で書き切れないほどたくさんのエピソードも生まれた。

今までの経過から、日本語教室ではなく、日本の子も外国の子もみんな地球の仲間であるという視点から、「地球子供教室」とした。中でも、学級で日本語のシャワーをたくさん浴び続けている子どもに、さらに日本語をとというのではなく、日本語の壁を低くした空間のしかけから始めた。すると子どもたちは、そこでは言葉を発するの

である。その言葉を間違っていると
言うのではなく、正しい日本語で鏡
に映すように言ってあげる。そのコ
ミュニケーションの関係は、結果的
に、テキストを使う学びからコンテ
キスト型の学びへと進化し、カリキュ
ラムも、縦型の文法を順番に学ぶの
ではない、楕円型の子どもの発した
言葉を言語構造につなげるという新
しいカリキュラムになった。この学
びの転換が、佐藤郡衛先生に認められ、放送大学で放映されることになったのであ
る。

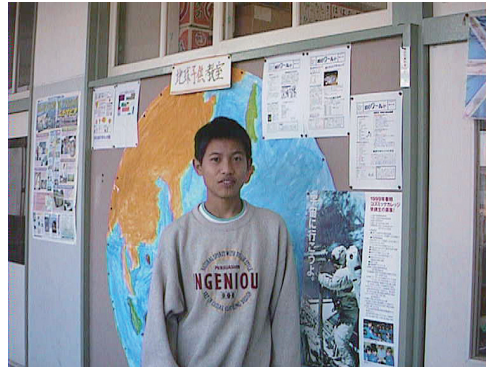


写真6. 地球子供教室

その当時、学校にボランティアを入れることはなかった。「たった5人を教えるの
にどうしてボランティアが必要なのですか。私は、40人を一人で教えています。」職
員会議での発言である。厳しい壁は常にあった。しかし、だんだんと理解され、学級
のサポートシステムとして生かされ、学校全体の国際化にも役立つたのである。

20. 都会の真ん中のハムスターと子どもたち、そしてミニミニ博物館へ

東京タワーのある港区の学校に異動した。学校が違う。教師の洋服が違う。学校に
はエレベーターがあり、靴は履き替えない。体育館とは別にホールがあり、いつでも
照明付きのステージが使える。先生は、前の学校ではジャージ姿のままの先生もいた
が、行き帰りや授業はスーツ、ネクタイである。同じ東京でもここまで違うのだと驚
いてしまう。

最初の学年である4年生、蛇の抜け殻を持ってきた男の子から、珍しいものの見せ
合いが生まれ、博物館が誕生した。大英博物館もこの見せ合いから始まったそうであ
る。博物館は、学年まで発展し、地球コーナー、都市コーナー、世界コーナー、宇宙



写真7. ミニミニ博物館

コーナーが生まれた。博物館に行ってみるのは楽しい。今回は、自分たちが創るのである。恐竜の足跡を展示するにも、相当研究して展示した。保護者の中に目の不自由な方がいらした。宇宙コーナーではロケット打ち上げのとき、椅子をゆすり発射した。そして、本当の博物館はどうなっているだろうと調べに行き、点字を学び、点字の説明カードを貼った。幼稚園児が見学に来た。都市コーナーの電車の街が高くてよく見えない。次回から踏み台を置いた。子どもたちは、バリアフリーを教えてもいないのに、次々と工夫を重ねて行った。

この博物館の一番のきっかけは、クラスで飼っていたハムスターの事からであった。このエサ代を生み出さなければならない。その時、起こったのが蛇の抜け殻事件であった。授業中に長さの学習の所で、机の引き出しから出てきたのである。ここで怒ってしまっていたら、博物館はなかった。「何センチメートルあるんだろう。」と授業で取り上げてしまったのである。「先生、博物館だったらお金をもらえるのでは」、自分たちのカードを売るなどの意見が出ていたので、それよりは、保護者会の時、親に見てもらうのもいいかと思った。お金をもらうのだったら、本当にいい本物の博物館を作らないといけない。保護者会の時、案内役と入場料10円の切符売り場も設けて実施した。子どもたちはすごい。出口に、ハムスターのジャン君を置き、寄付金を募ったのである。ここにたくさんのお金が入っていたのである。

21. 学級崩壊と子どもたち、そして地球を物語る教室へ

博物館を作った子どもたちを高学年でも受け持ちたいと思っていたが、校長先生からどうしても2年生の担任をやってほしいと頼まれた。そして、引き受けてみると、全校朝会で並べない、教室はすぐにゴミだらけになる。清掃で来ている6年生が1年生の時もこうだったと話す。チャイムが鳴っても席に着かない。ほぼ学級崩壊のクラスであった。低学年での崩壊、調べてみると高学年とは違う原因で、よく起こっている。どこもゴミだらけになっている。最初の保護者会は厳しかった。港区の白金エリアで極めて教育熱心な保護者たちである。ここで不安感を持たせてはますます状況はひどくなると判断し、この問題は全国でも起こっている問題であり、ちょうど国際理解教育学会の研究委員会の副委員長をやっていたので、月に1回は大学の研究者の先生方がいらしていたこともあり、ここは今までの学級と異なり、解決できると大見えを切ってしまった。去年の保護者が、「先生、そのくらい言ってよかったみたいですよ。」と教えてくれた。

さて、どうするか、叱ったり、並び方を練習したり、いろいろとやってみたが、確かに反応が違う。ここでも判断留保の原則で、従来の2年生はこのような姿という既成概念を取り払うことにした。この概念で見ている限り、マイナス面ばかりである。まずは、実態を見てみると、社会的関係は対人関係も含めて弱い。しかし、知識力は素晴らしくあると思った。まずは、ゴミだらけを解消することから始めることにした。

そこで、やったのが「My えんぴつ」の作戦である。つまり、対人関係だけではなく、自分とモノとの関係性が育っていないのである。ある日、今日は7本えんぴつが落ちていたと言うと、「ごめんなさい」と前に出てきて謝ったのである。これは教師に対してではなく、自分のえんぴつに対してであった。ここから、My シリーズの改革が進んだ。このクラスの実態を保護者にも学級新聞を通して知らせた。他の先生からはよくこのような中で出せますねとも言われた。しかし、実態と同時に、なぜそれが起きているか、何が問題かを書き、これをどのような方法で解決するかも書いたのである。すると、他の先生や給食の職員からも読みたいのくださいと言われるようになった。

あるレベルまで進んだ後、学級の隣の空き教室を使って、子どもたちの持っている知識力を生かし、宇宙・都市・世界・地球などのコーナーごとの活動を始めた。むしろ本質は幼児教育のごっこ遊びでの関係性づくりである。しかし、教育熱心な親に対しては、このことは言えない。むしろこのような研究をしていると説明した。

子どもたちは、たいへん関心を持ち、研究を進めた。この学習の内容も重要だが、こちらのねらいは、関係性づくりである。コーナー同士で、場所取りの喧嘩が起っても、むしろいいチャンスである。子どもたちは、活動するとき道具をきちんと整理していた方がやりやすいなど、いろいろなことを学び合っていた。

教科学習も、一人一人とアイコンタクトをして、一緒に学び合おうというサインから始めたが、ほとんどの子どもが授業への参加態度もよくなった。授業参観の後、保護者はこの変化を見て、たいへん協力的になり、保護者参加の子どもたちとの学び合い、学級集会も開いてくれるようになった。2学期、ウミガメがプラスチックを餌だと思ひ飲み込んで死んでいっているという新聞記事を子どもが持ってきた。この問題解決に、各コーナーが知恵を出し合い、「地球の真ん中で出会ったペットとボトルの物語」を作った。そして、劇を学芸会でやった。4月当初の実態からここまで来た子どもたちを見て、親たちも涙を流していた。

この教室は、3学期は「地球の真ん中で出会ったアフリカゾウと子どもレンジャーの物語」を創作し、演じたのである。この教室は、地球子どもスタジオになり、学習や生活面でも波及効果は表れ、算数の長さの単元で、実物のアフリカゾウを作り、学習した。

もう一つ、このクラスにとって幸いだったのは、オーストラリアと日本を渡り鳥のように行き来しながら学んだRの存在である。これは、「おはスタ」にも取り上げられた。Rの母親は、よく学校



写真8. 2年生ゾウとレンジャーの物語

に来てビデオを撮っていた。この崩壊の様子を撮られるのもなーと思っていたが、反対することもなかった。実は、保護者会で、まだ厳しい顔をした親たちであったが、Rの親がビデオを撮っていることに対して、学級崩壊だとは思っていなかったと話したのである。オーストラリアでは、一斉授業は少なく、グループ学習が多く、授業中でもよく席を立って動いていると言うのである。これを聞いた日本の親たちは一気に頬を緩め、教室の空気が一変したのである。

その後、この子どもたちが中心になって、地球子ども博物館をつくり、卒業してからも来てくれたのである。

そして、椋山女学園大学がシドニー研修を行っているが、私が大学に来て、シドニー研修の担当だと知ると、同じ時期にシドニーに来て椋大生をチューター役で助けてくれているのがこの家族と母親である。

このようにだんだんと椋山女学園大学に赴任し、附属小学校の校長も経験し、さらに実践は続くが、これまでの実践の積み重ねから来ていることがよく分かった。



写真9. 地球子ども博物館とR親子

最後に、なぜブルキナファソかというエピソードであるが、この白金の町と関係するのである。白金の商店街がブルキナファソに関わることになり、街のフェスティバルで募金活動などを大人がやっているのを見て、子どもたちが自分たちも駄菓子屋をやり、募金したいと言う。その時、名古屋に来ていた私を思い出し、ちょうど東京大学の授業で毎週東京にきていたこともあり、子どもたちに国際理解教育を実施したのである。この場所をいろいろな学校の子もいて、「地球子ども広場」という名前にしたのである。

この町のネットワークもすごく、世界銀行、大学、JICAを動かし、ブルキナファソと世界銀行のシステムを使い、「地球授業」を実施したのである。このような体験をしていることもあり、椋山女学園大学附属小学校を含めた椋山での大陸間活動につながっていったのである。

終わりに

エピソードを通して、自らの実践を振り返ると、今まであまり意識していなかったが、どの学校やケースでも、実態の観察・調査・探究を行っている。その実態把握の場面で、アンケートなどでの調査ではなく、むしろ完全参与観察者の視点を持ち、質的な観察から、意味づけること、さらにレヴィ＝ストロースの深層構造のように見えない基底的な実態への探索、それらをエスノグラフィーとして、記述し、語っている。そして、研究者として、そこで終わるのではなく、教育者として、その実態をよりいいものにするために、いろいろな教育実践を生み出している。極めて深刻な問題への取り組みもあれば、新たな課題への独自の取り組みもある。

その取り組みの実践を生み出す発想と過程は、C. W. ミルズの社会学的想像力を用いて、学習者に、学級社会をリアルに社会的想像空間として、子どもたちに提示し、子どもたちは、そのコミュニティへの主体的な参加者として学び合い、行動するのである。その媒介として、ニューヨークの事例のようにテキスト化したり、学級崩壊のクラスのようにドラマ化したり、地球子供教室のように教室空間自体にしかけ（レトリック）を入れ込んだり、空間自体を世界や都市に変貌させる地球子ども博物館にしたりしている。

私の実践には、地球〇〇が多いが、実は日本では、地球というと科学概念で難しいと捉えられてしまうのである。しかし、アメリカでは、グローブという概念があり、国際教育をやっている教室は、グローバルクラスルームであり、先生は、グローバルティーチャー、生徒はグローバルスチューデントと呼ばれ、社会文化概念として日常的に多用されている。そこで、私は、地球を社会文化概念として使うために、地球子供〇〇などが多いのである。

そして、その地球子供〇〇空間に巻き込むプログラムは、態度形成で貫かれている。それは、学級の捉え方を早い段階で、学習集団としてよりも子どもにとってリアルな学級社会として捉えていたことから始まり、グローバルイシューへの取り組みなど、知識としての国際理解教育ではなく、宇宙船地球号の教育として出会ったアクティビティズンシップとしての国際理解教育の段階から始まったのである。その最も基礎になったのが、G. H. ミードの自我論である。また、プログラムの開発においては、態度形成を重視し、情意的側面、認知的側面、価値的側面、技能的側面の4つの側面論で宇宙船地球号プログラムは開発し、現在、出前授業として行っている宇土ゼミプロジェクトのプログラムでも生かしている。総合的な学習のプログラムづくりには大いに役立つと思う。また、子どもたちの内省を促し、それを教師と子どもが相互に評価し合い、学びの工夫へとつなげているのも重要な視点であると思う。

今回は、椋山女学園大学に来るまでのエピソードであったが、椋山に来てからも、附属小学校の取り組み、ゼミの取り組み、椋山女学園人間学研究センターの環境と人間プロジェクトの取り組み、そして、ブルキナファソ、フランス、日本による大陸間

教育プロジェクトの取り組みなど、エピソードはまだまだ続く。このエピソードを理論的な視点から読み直していくことのおもしろさと重要性に、今回気付かされた。また、原体験的なエピソードが潜在的につながっている事にも気づかされた。



写真10. 大陸間ミュージカル I LOVE WATER

ジオラマによる団地プロジェクトでは、明らかに、ヴィゴツキーやエンゲストロームの拡張的学習理論とのつながり、ロゴフの Guided Participation など、理論との往還による意味づけを見出すことができた。小学生のころ、島原半島のジオラマを自分ですべて作り、都市計画のように、この地域には空港をここには高速道路をなどよく考えたことがあった。そして、実際に、子どもたちだけで、海岸線をずっと歩き続け、親から怒られたこともあった。また、川をずっと上流まで追って、そのころは知らなかったが、扇状地の伏流水を見つけたこともあった。教育の実践的エピソードは、まさに原体験と研究的エピソードと深層でつながりながら、目の前の子どもたちと共に過ごした事実として、現れているのである。まさに生成実践の構造である。



写真11. 団地プロジェクト

人生のターニングポイントを迎えた今、大陸間教育による従来の異文化接触ではない、新たなAIやICTを使ったサイバー空間に作った地球子ども広場（GLOBAL KIDS SQUARE）での実践など、やるべき課題は多い。しかし、新しい学習指導要領でも言われている学び方・生き方、主体的・対話的で深い学び、カリキュラムマネジメント、開かれた教育課程等は、今回のエピソードでわかるように、相当以前から実践していたことだと改めて思う。

この深い学びによる学び方、生き方を目指す教育は、確かに重要である。ちょうど年賀状が届き、小学校2年生の学級崩壊のクラスを立て直すきっかけになった「地球の真ん中で出会ったペットとボトルの物語」でドクターの役をやった子から、「大学は医学部に進学し、インターンも終了し、救急医療の現場で働きます。あの2年生の時の劇を思い出します。」と年賀状に記載されていたのである。小学校2年生の時の担任に送ってくれたうれしいプレゼントであった。今、日本は、教育においても先進国ではないと言われる。これからの教育を考えると、子どもや教育の実態を捉える研究と共に、教師がダイナミックなカリキュラムを生み出す力とその過程の研究が必要であると考えられる。

最後に、宇宙船地球号の乗組員として、自らの地域と、そして地球の持続可能性を求めて、教育実践を創り出す新たな教育が生まれてくるのを期待しています。

■注

- 1) 佐藤学「カリキュラム研究と教師研究」安彦忠彦編『新版カリキュラム研究入門』勁草書房 p. 157 1999年
- 2) 志水宏吉「エスノグラフィー」秋田喜代美・恒吉僚子・佐藤学編『教育研究のメソドロギー～学校参加型マインドへのいざない』東京大学出版会 p.140 2005年